2021
研修分科会報告書

―「コロナ禍で大学図書館の役割を問い直す」―

私立大学図書館協会東地区研究部
2021｜研修分科会

2021 研修分科会報告書

―「コロナ禍で大学図書館の役割を問い直す」―

私立大学図書館協会東地区研究部 2021 研修分科会　編集

2021 年 12 月 28 日発行

私立大学図書館協会東地区部会　2021 研修分科会参加者

北里大学　白金図書館	梅内美鈴
共立女子大学短期大学　図書館	横塚麻里
慶應義塾大学　信濃町メディアセンター	西﨑亜砂子
慶應義塾大学　メディアセンター本部	竹田咲子
国際基督教大学　図書館	砂田ゆとり
国立音楽大学　図書館	小山照美
駒澤大学　図書館	北原敦子
昭和薬科大学　図書館	横田浩一
実践女子大学　図書館	中村陽子
聖徳大学　図書館	小林夏子
大正大学　図書館	伊藤美雲野
中央大学　図書館	高木隼人
帝京大学　メディアライブラリーセンター	古屋敷果歩
日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学図書館	阿部なつき
日本体育大学　図書館	高橋典子
日本体育大学　図書館	菊地紗彩
法政大学　市ヶ谷図書館	有川博隆
法政大学　多摩図書館	胡本文耀
明治学院大学　図書館	茂木みな
明治大学　学術・社会連携部図書館	吉光寺美和子
立教大学　図書館	川岸哲平
立正大学　図書館	松原昂希
和光大学　図書館・情報館	鍬形七海

目次

はじめに 1
第 1 回 「コロナ禍で大学図書館の役割を問い直す」..... 2
第 2 回 「電子ブックのこれから」..... 4
第 3 回 「バーチャルライブラリーツアー試写会」 6
第 4 回 「オープンサイエンスの世界」 8
第 5 回 「情報サービス:その裏側の技術から」 10
第 6 回 「図書館と学生との協働 :その目的と効果を検証」 12
おわりに..... 14

はじめに

コロナウイルスの蔓延によって、大学ではオンライン・ハイブリッド授業が盛んになるなど、あらゆる方面でのデジタル化が推進された。図書館では全く来館できない時期があり、これまで行ってこなかった業務、宅配貸出や動画作成、HP 上にアップするための資料作成等デジタル化が進んだ。以上の背景から図書館職員に新たなスキルが求められるようになった。

このような背景から 2021 年度研修分科会は、第 1 回「コロナ禍で大学図書館の役割を問い直す」、第 2 回「電子ブックのこれから」、第 3 回「バーチャルライブラリーツアー試写会」、第 4 回「オープンサイエンスの世界」、第 5 回「情報サービス：その裏側の技術から」、第 6 回「図書館と学生との協働：その目的と効果を検証」をテーマにオンラインで開催された。参加するにあたり、「教えてもらう」とは少し異なった「自ら学ぶ」姿勢で問題意識を持ち解決に向けて考える PBL（問題解決型）を意識して学んできた。この研修を通じて大学図書館サービスの高度化に資することが学べたのではないだろうか。

本報告書では、各回の「テーマの趣旨」、「講演内容」、「実習・ディスカッションの内容」、「学びと考え」をまとめるとともに、大学図書館の役割とは何か、大学図書館の職員に求められる新たな能力とは何か考える。また、報告書の作成を通じて、図書館職員として今後どういった知識・技術の研鑽をしていくべきか検討する機会としたい。

文責　菊地紗彩（日本体育大学）
小林夏子（聖徳大学）
横田浩一（昭和薬科大学）

第１回「コロナ禍で大学図書館の役割を問い直す」

① テーマの趣旨

アウトソーシングやコロナ禍によって大学教育や大学図書館の在り方が変化する中で、専任職員には従来の図書館業務だけでなく、マネージメント力が求められている。大学図書館の置かれた現状や今後の動向を学ぶことで、自分の図書館を見つめ直し、大学図書館の役割や未来を考えることを目的とする。

② 講演内容

タイトル：『新しい大学教育を創る　コロナ禍で図書館の役割を問い直す』

講演者：松本美奈氏（ジャーナリスト）

①図書館の価値

コロナ禍において必ずしもキャンパスが必要とされなくなった今、図書館の存在価値も変化している。「大学における教育研究活動を支える大学図書館」と言われているものの、図書館の利用方法すら知らない学生がほとんどで、蔵書やアクティブラーニングを学生とつなげることができていないのが現状である。

図書館の書架には、「古今東西の知に対する畏怖」「インターネットにはない総覧性」「実際に手に取ることで思考が広がる発散と収束」があり、分類法そのものが教材として機能する可能性を持っている。存在意義を売り込むためには、教員はどんな本を読んでいるか、どのような授業をしているかを知り、授業とタッグを組んでいく取り組みも必要となってくる。

②事例

帝京大学の授業において図書館員とともに授業課題にまつわる書架を作る取り組みを行っている。側面が黒板になっており、館内に分散させて配置することで学生が館内を歩き回るように誘導する工夫がなされている。また、「1 行読書 100 字書評」という、冒頭の１行のみを読んで書評を書くという取り組みでとにかく本を手に取らせて想像力を働かせることも行っており、書いたものを図書館に貼りだすことで学生の足が向かうよう工夫している。

③まとめ

大学図書館の職員は他部署と比べて一歩引いた立場に立つ人が多いという印象を語り、図書館の存在意義を売り込んで存続させるためには、授業との共同、教員・学生を巻き込んだ積極的な取り組みが必要となると述べた。

③ 実習（課題）・ディスカッションの内容

課題：今の図書館にとっての問題点は何かを 3 つ考える

ディスカッション：5 グループに分かれて、それぞれの図書館が現在抱えている問題点・課題を出し合った。全グループに共通して、電子ブックの予算や選定方法、職員の専門性の維持、書架の狭矮化など設備面の使い方が挙げられた。また、コロナ禍における図書館利用の制限及びオンライン移行への対応についても各グループで話し合われていたようだった。

④ 学びと考え

大学図書館は、情報資源や学習の場を設えて提供するという従来の役割を継続するだけでなく、学生の関心を集め新たな活用法を引き出す工夫が求められている。講演で例示された授業との連携による学生参加型の課題など、外部との交流によって新たな価値を生み出していくことができると学んだ。松本氏が自身の経験から、学生は何か夢中になれることをしたいと望み、役割を与えると生き生きと取り組むと語っていたのが印象的であった。一方で、窓口に来てもこちらから声をかけないと話せない学生が多く、普段の図書館サービスにおいても、利用者を待つだけでなく、巻き込んでいく姿勢が必要とされている。

教員への働きかけにより新たな取り組みを行うことで、図書館の従来の役割だけでなく、新たな存在価値をアピールし可視化していくことが重要である。

文責　阿部なつき（日本赤十字秋田看護大学）
鍬形七海（和光大学）
高橋典子（日本体育大学）

第 2 回 「電子ブックのこれから」

① テーマの趣旨

コロナ以前、電子ブックは大学図書館において、全体的に定着が進んでいるとは言えない状態であった。しかしこのコロナ禍をきっかけとして、一気にその存在が注目されることになった。

しかしながら、電子ブックの導入には様々な課題が山積している。物体としての形をもたない電子ブックをいかに利用者に周知し利用を促進していくのか。また、いずれの大学図書館も予算削減が求められる中で、冊子体書籍に比べ高額な電子ブックをいかに提供していくか。そういった大学図書館が抱える様々な課題を検討することを目的とする。

② 講演内容

タイトル：『電子ブックのこれから』

講演者：西田和之氏（紀伊國屋書店）

KinoDen は特に専門書を扱う和書電子ブックのプラットフォームである。コロナ禍において電子ブックの特長が評価され、図書館への導入が進んでいる。課題は、図書館業務において電子ブックを扱うワークフローや選書基準等が確立していないことである。コンテンツ数の不足などベンダーや出版社が一緒に取り組むべき課題もある。

タイトル：『海外電子出版・電子書籍動向』

講演者：川村俊之氏（紀伊國屋書店）

全世界の電子出版について、市場の成長が見込まれている。またアメリカの図書館において、図書館予算に占める電子の割合が増えている。

OA2020 や PlanS が活発である影響を受けて、アメリカの教科書市場では電子ブックのオープンアクセス(OA ブック)化を進める動きがある。資金獲得についてはクラウドファンディング型などの試みがなされている。

出版社の動きについて、海外の学術大手出版社は大部分のブックを電子化済みである点が日本の出版社との違いである。価格体系は世界的に買切モデルが主流だったが、年間購読モデル(サブスクリプション)の試みが出てきた。

③ 実習(課題)・ディスカッションの内容

課題：学習支援に電子ブックを活用するためには

ディスカッション：グループ討議（以下、話題に上がったトピックを列挙）

1.接続：学生が電子ブックを使用する際に接続方法が分からないことがハードル。

2.入手性：学生から購入希望が寄せられた資料が、必ずしも電子版になっているとは限らない。紙の資料に比べ電子版は高額であることが課題。

3.利用者への周知：目に見えるものではないので、存在をいかに学生に周知するかが鍵。

④ 学びと考え

全世界的な電子出版の動向や、電子資料への需要の増加の観点などから、日本の大学図書館でも電子ブックの導入を進めていくべきである。そのために、様々な面でのハードルを解消する必要がある。

まず、学内における広報の課題がある。学生への広報としては教員から薦めてもらうのが効果的であるため、まずは教員へ呼びかけ、教員から利用促進するような雰囲気を作り出す必要がある。

次に、リテラシー教育の課題である。教育機関として、正しい利用方法を伝えることや、学習・研究への有用性を示すことは重要な役割である。

最後に、電子ブックのタイトル数が少ないこと、価格が冊子に比べて高価であることなど、電子ブックの購入のしにくさの課題がある。出版社が交渉の場についてくれない現状があるため、大学図書館として、コンテンツの改善にどう働きかけたら有効かを考える必要がある。

文責　北原敦子（駒澤大学）
竹田咲子（慶應義塾大学）
茂木みな（明治学院大学）

第 3 回 「バーチャルライブラリーツアー試写会」

① テーマの趣旨

例年の研修分科会では夏季図書館見学ツアーを行っていたが、今年度はコロナ禍ということもあり、ツアーの開催は厳しい状況だった。代替として、各自で図書館紹介動画を作成し、その試写会を行った。図書館をアピールするための動画作成技術を磨くこと、また技術だけでなく、短時間で魅力的に表現することを目標とした。試写会の後、各自で作成した動画の創意工夫のポイントを解説し、最後に投票でバーチャルライブラリーツアー賞を決めた。

② 講演内容

島田貴司氏（立正大学）によるプレミアム試写会

「私立大学図書館協会 2011 年度海外集合研修動画（2012 年度国立情報学研究所大学図書館職員短期研修で上映）」の鑑賞

③ 実習（課題）・ディスカッションの内容

課題：図書館紹介動画作成

内容：各自の図書館を紹介する動画を作成する。動画時間は 5～8 分とした。また、図書館を紹介する対象（相手）は各自で設定し、新入生、学外者、一般広報、他大学図書館など多岐に渡った。

④ 学びと考え

当日鑑賞した動画には、豊富なアイデアが詰まっていた。例えば、ストリートビューやアバター、動画ソフトなどの技術的なアイデアや、学生になりきったり、マスコットキャラクターが案内役になったり、右上にマップを配置しておくなど見る側の立場になったりなどの工夫が見られた。バーチャルライブラリーツアーでは、様々な動画技術やアイデアを共有できたことが収穫である。現代の学生は、動画に触れる機会が多くなっている中で、図書館の魅力を発信するためには、職員も高い技術と表現力を習得する必要があると感じた。新しい図書館サービスの一つとして、来館が困難になった利用者にも動画などオンラインサービ

スを提供できるようにしていきたい。またポストコロナ時代においては、各大学でバーチャルライブラリーツアーが普及することを目指したい。

文責　有川博隆（法政大学）
伊藤美雲野（大正大学）
吉光寺美和子（明治大学）

第 4 回 「オープンサイエンスの世界」

① テーマの趣旨

2021 年 7 月に日本私立大学連盟から『ポストコロナ時代の大学のあり方』という提言を受け、図書館職員の在り方が再度見直されつつある。現在、求められる図書館員像の一つが研究データを管理するデータ・ライブラリアンかもしれない。

図書館界では、ここ数年「データ・ライブラリアン」を目指す傾向がある。第 4 回では、身近な図書館業務になりつつある機関リポジトリについて知り、そのデータの組織化・構造化・保存・共有・公開・再利用を支援することが、図書館の役割となっていることについて学んだ。

② 講演内容

タイトル:『「オープンサイエンス」の世界に踏み入れる図書館員のみなさまへ』

講演者：田辺浩介氏（国立研究開発法人　物質・材料研究機構）

オープンサイエンスとは、研究成果に容易にアクセスできること。また、そのための技術、システム、政策のことを指す。

2013 年 G8 サミットからオープンサイエンスの必要性が議論されはじめた。近年国内においても大学での研究成果については、公費を使用していることや学術研究の進展に欠かせない等の理由で、公にすべきであるとなり、オープンサイエンスが進められてきている。

研究者が容易にアクセスできたり、データを利用したりするためには、データを一意に識別するために識別子（ID）の付与が重要である。代表的な識別子には、DOI や Handle などが挙げられる。また、各コンテンツへのアクセスは WebAPI によるものが多く、国際的に共通した登録が必要となる。

実例として、Materials Data Repository (MDR) が紹介された。論文や学会発表等に加え、材料データを収集・保存し、物質・材料研究の推進やマテリアルズ・インフォマティクスに適した形で公開するためのデータリポジトリである。利用者は材料に関するメタデータ項目や全文検索で文献・データを探し、閲覧・ダウンロードすることが可能である。

このような中、データ・ライブラリアンに求められるのは、学内の他部署や研究者との協力ができる職員である。また、機械に読みやすいデータを作るなどの能力が必要となる。

③ 実習（課題）・ディスカッションの内容課題

課題：自分が所属する機関のリポジトリ業務を知る

研修分科会参加者 23 名の所属館は機関リポジトリを導入していたが、何かしらの識別子を付与しているのは 10 館のみであり、オープンアクセス環境が十分に整っているとは言えなかった。機関リポジトリ運営に関する悩みとしては「専門的な知識の不足」「コンテンツの充実」「関係部署間での情報共有、連携不足」等が挙げられた。

④ 学びと考え

大学図書館は社会における知的基盤として、デジタル・非デジタルを問わず、知識、情報、データへの障壁なきアクセスを可能とする環境を整える必要があることがわかった。まずは、学内の機関リポジトリを整備し、識別子を付与していくことが、オープンサイエンスへの第一歩となるだろう。

より一層データの組織化・構造化・保存・共有・公開・再利用を支援するためには、研究者をはじめ、学内関連部署とのコミュニケーションを取り、どのように情報を整理したら利用しやすいのか、大学図書館として主体的に取り組むべきだと考える。

文責　川岸哲平（立教大学）
小山照美（国立音楽大学）
横塚麻里（共立女子大学）

第 5 回 「情報サービス:その裏側の技術から」

① テーマの趣旨

図書館業務の技術向上には、「読み・書き」の両面からのアプローチが求められる。情報管理としてメタデータを作成する「書く」業務では、データが利用者にどのように使われるかを事前に想像する必要がある。一方、レファレンスや ILL のサービスを円滑に提供するためには、「読む」技術が求められる。データの所在や出所を把握しておくことは、読む技術の向上に有用だ。

利用者に対して満足いく回答をするためには、常に最新の情報サービスツールを使いこなせる状態を保つことが理想である。利用者が求める情報を手に入れるまでを情報サービスと捉え、レファレンスと ILL やレフェラルサービスについて考える機会としたい。

② 講演内容

タイトル :『情報サービス : その裏側の技術から』

講演者 : 林賢紀氏（国立研究開発法人国際農林水産業研究センター　情報広報室広報資料科 情報高度利用専門職）

テーマの趣旨を念頭に、情報データサービスの技術面について以下に挙げるトピックや事例の技術的特徴や変遷、現状について解説を受けた。

・CiNii Books および CiNii Articles と電子リソースの関係

・国立国会図書館サーチ : ファイル投入および API 連携による統合的な検索

・リンクリゾルバ、ディスカバリーサービス

・検索システムとしての Google 及び Google Scholar

・情報サービスを実現するための技術 : JPCOAR スキーマ、DCNDL 等

・データ同士をつなげる技術 : DOI、ORCID、VIAF、LOD の構造や技術的特徴

情報サービスがどのように作られているか（メタデータの収集・交換、データの粒度等）を意識すること、OPAC・機関リポジトリ等、広く公開され「みんなが検索できるデータ」として流通するからこそ、データを作成することが重要である。

また、実習課題について、「実際に検索」する際のポイントを押さえること、紹介□作成にあたっては「利□者の要求」を 5W1H で整理してサービスにつなげることが挙げられた。

③ 実習（課題）・ディスカッションの内容

事前課題：各自の大学で導入している有料データベースの中で、使われる頻度の高い 3 つを用いて実際に検索し、その紹介文と取り扱い説明（検索上の注意点等）をまとめる。可能であれば収録されている（メタ）データがどこから来ているか、また、どのように作成されているかについて考え、Google Form 上に記入する。

実習：事前課題で挙げられた複数のデータベースに関する質問がいくつか用意されており、検索する等の方法で質問の回答を作成する。1 人あたり 2 つのデータベースが割り当てられ、調べるための時間として 30 分が与えられる。その後、回答の発表を行う。

④ 学びと考え

講義では、研究データポリシーの策定が今後義務付けられると言及があり、図書館員は図書館を取り巻く環境の変化に対応していく必要があると学んだ。また、課題を通して、データベースとレファレンスとの関係性について実践的に学んだ。Google や Wikipedia で欲しい情報が簡単に手に入る近年では、利用者は検索を行い求めている情報が見つからない場合、情報を見つけられないのではなく情報そのものがないと考える。そのため、図書館員は利用者が求める情報検索に適したデータベースを案内する必要がある。

図書館が提供できる情報サービスとして、Web サイト上でのデータベースのカテゴライズを利用者に対して分かりやすくすることや、欲しい情報への誘導をスムーズにする画面のデザインを考えることが挙げられる。

文責　梅内美鈴（北里大学）
砂田ゆとり（国際基督教大学）
高木隼人（中央大学）

第 6 回 「図書館と学生との協働

:その目的と効果を検証」

① テーマの趣旨

大学図書館サービスは各々の大学における教育・研究支援を実現するうえで重要な役割を果たすが、図書館職員のみの働きで十分に機能するものではなく、教育の主体を担う教員との協働が不可欠である。主体的な学び・アクティブラーニングの重要性が取り上げられてから、既に相当の期間を経ており、ラーニングコモンズなど学修環境の整備は各大学での相当な努力により成果を上げてきている。

多くの大学において学生が図書館・情報センター等の各組織のスタッフの一員として参加する形で協働の具体的な実態が大学ごとに様々な形で進んできた。これらの背景を踏まえて、図書館での学生との協働を検証することにより、今後の図書館サービスの目標・課題等を共に考えた。

② 講演内容

タイトル :『学生と図書館との協働』

講演者 : 茂出木理子氏 （東京工業大学 事務局参事 兼 研究推進部情報図書館課長）

東京工業大学をはじめとする様々な国立大学図書館での学生協働について豊富な事例や協働を行うに至った過程が紹介された。九州大学附属図書館の「図書館 TA（Cuter）と協働した学習支援活動による図書館サービスの高度化」が、令和 3 年度国立大学図書館協会賞を受賞した例に触れ、組織としての「仕掛け作り」も行いつつ、新しいことに挑戦し、楽しく前向きに楽しんで、学生と取り組んでいくことが、今後、図書館サービスの高度化に資する図書館職員につながると結んだ。

③ 実習（課題）・ディスカッションの内容

課題 1 : 参考サイトを読む

茂出木理子氏 『東工大生の、東工大生による東工大生のための』謎解き脱出ゲームを実施して ～『任せ・きる』視点からの学生協働～

ラーコモラボ通信 第 76 号 2017.11.26

https://note.com/riko_m/n/n6956ca524c91

課題 2：各自、学生との協働事例調査を行う

学生との協働企画の目的、概要、学生団体名（愛称）、大学院生等のアドバイザー、アシスタントの活用有無、学生アルバイトの有無、「学生との協働」での議論の有無等

④ 学びと考え

学生との協働は比較的新しい試みであり、全ての大学図書館が取り組んでいる状況ではなく、また取り組んでいる大学であっても、その協働の在り方は様々な形態があることを実習を通じて各大学参加者で共有した。その形態を大きく分けると、①授業の一環として正課としての取組、②大学の課外活動として行うボランティアとしての取組、③奨励金を支払うアルバイトのような位置付けとしての取組の 3 つに大別できた。また、現在取り組んでいない大学においては、上記 3 つの取組のうち、どの形態で実施し、どのように内規等の制度設計を行うかを課題として検討していることが分かった。茂出木理子氏の講演内容にもあったが、大学図書館とは、よく利用する学生にとっては、非常に身近な存在であり、大学内でも学生との関係が非常に濃密な部署であると言える。しかし、全学生からの視点で見ると特定の学生に限られてしまうため、学生と図書館の関係性が淡泊に見える一面もあり得る。そういった相反する二面性からの突破口として学生との協働は効果的な取組であると考える。

文責　胡本文耀（法政大学）
中村陽子（実践女子大学）
古屋敷果歩（帝京大学）

おわりに

2021 年度研修分科会は、全 6 回の活動を Zoom によるオンライン形式で行い、「コロナ禍で大学図書館の役割を問い直す」を大きなテーマとして、大学図書館のサービス等について学んできた。

従来であれば、第 3 回は実際に図書館を訪問し見学するという内容だったが、今回は参加者が各自の勤務する図書館の紹介動画を作成し、それを共有するという試みがなされた。これまでは訪問した大学の図書館しか見学ができなかったが、オンラインになったことで、画面越しにではあるが参加校すべての図書館を見学できた。対面の良さがある一方、オンラインならではのメリットもあることを実感した研修となった。

図書館利用者に提供するサービスについても、いまやオンラインという観点は欠かせないものになっている。また、オープンサイエンスの推進を背景として、研究データ管理に携わる図書館員の育成が注目を集めるなど、図書館員に期待される役割はますます多様化している。大学図書館の在り方は、今まさに転換点にあるといえるだろう。そのような変化の激しい時代においては、我々が自ら課題を発見し解決に取り組んでいく姿勢が必要であると、今回の研修分科会を通じ学ぶことができた。

最後に、研修分科会の実施にあたり、ご講演いただきました講師の皆様には大変お世話になりました。今年度は初めてのオンライン開催となり、直接お会いすることは叶いませんでしたが、多くの貴重なお話を伺うことができました。講師の皆様、またご調整いただきました大学図書館支援機構の高野様に、この場を借りて御礼申し上げます。

文責　西﨑亜砂子（慶應義塾大学）
松原昂希（立正大学）

2021 研修分科会報告書

「コロナ禍で大学図書館の役割を問い直す」

2021 年 12 月 28 日

編集・発行 私立大学図書館協会東地区研究部 2021 年研修分科会

https://www.jaspul.org/index.html